

「ラストピース」

第2話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18）大学1年生

高橋湊（13）（22）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

白水透（54）バーのマスター。

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凜子（34）護身術の師範

竹内早紀（40）高橋の母親

林彩乃（18）大学の1年生

沢田翼（21）ダイビングサークルの3年生

OB

部下

僧侶

アナウンサー

女子1

女子2

女性客1

女性客2

○（高橋の回想）長野県・山沿いの道

高橋湊（13）、中身の入っていない  
スクールバッグを背負い、小石を蹴り  
ながらトボトボと歩く。

○（高橋の回想）公園・前

高橋、足を止める。  
銀杏の木々に覆われた奥まった公園。  
鈴木理菜（9）がたこの滑り台の上で  
体育座りをして膝に顔を埋めている。  
ランドセルを背負ったまま。

高橋M「またいる」

○（高橋の回想）同・公園の中

高橋、無言で理菜の隣に座る。  
理菜、高橋をチラッと見て再び膝に顔  
を埋める。

高橋「今日も1人？ やっぱ友達いないんだ  
ろ」

理菜「（拗ねて）……いるもん」

高橋「いいな。(自嘲するように)俺は友達  
いなくなつた」

理菜「…ケンカしたの？」

高橋、空を見上げて、

高橋「ケンカなら良かったんだけどなあ…」

理菜「…じゃあ、私が友達になってあげる」

高橋「(ニコツと)マジ？ サンキュー」

と、拳を出す。

理菜「？」

高橋「グーを合わせんの」

理菜、おそろおそろ自分の拳を高橋の  
拳にくつつける。

高橋がニコツと笑っても、理菜は表情  
を変えず、どこか寂しげ。

高橋「悲しいこととか嫌なことがあつたんな  
ら話くらい聞くぞ。俺ら友達なんだろう？」

高橋M「どうせ友達と喧嘩したとか、親に怒  
られて家に帰りづらいとか、それくらいの  
理由だと思つてた。だけど…」

理菜、俯いて、

理菜「（小声で）パパとママ……」

高橋「ん？」

理菜「（目に涙を浮かべて）パパとママとラ  
リーに会いたいっ……」

と、涙をこぼす。

高橋、言葉に詰まる。

理菜「パパもママもラリーも、みんな死んじ  
やったああ」

と、声を上げて泣き出す。

高橋、全てを悟った表情。

高橋M「この女の子の身に一体何が起こった  
のか、俺はすぐに分かった」

高橋、唇を噛み締め、拳を握りしめる。

理菜「（泣きながら）理菜をおいてかないで  
よお。1人にしないでえっ」

高橋、理菜から顔を逸らして、

高橋「（震えた声で）ごめん……ごめんな」  
と、隠した目元から涙が頬を伝う。

理菜、ぐしゃぐしゃの顔で高橋を見る。

理菜「お兄ちゃん、泣いてるの……？　なん

で……？」

高橋「（鼻声で）ハハッ……なんでだろうな」

と、袖で涙を拭く。

理菜、再び顔を歪めて鼻を吸る。

高橋、理菜の頭に優しく手を置く。

高橋「大丈夫、1人じゃない。俺が一緒だから」

と、優しく理菜の頭をポンポンとする。

○アパート・高橋の部屋の中（朝）

高橋（22）、タブレットを腕に抱いたままソファに横になっている。

スマホのアラームで目が覚める。

立ち上がり、首筋をほぐすように肩を回す。

高橋「（掠れた声で）ああー首イテエ」

と、机の上にタブレットを置く。

机の上にはプリントアウトされたネットニュースの記事たち。

「古諏訪夫婦殺害事件」の文字。

○（高橋の回想）長野県・山沿いの道

高橋（13）、走っている。

○（高橋の回想）公園・前

高橋、公園の前で止まる。

公園の中では僧侶が箒で落ち葉を掃いている。

○（高橋の回想）同・公園の中

高橋「あの……」

僧侶、箒を動かす手を止めて、

僧侶「どうかしたか？」

高橋「ここに女の子が来ませんでしたか？」

小学生の「

僧侶「はて、女の子……あー！来ていた

よ。これくらいの女の子が1人」

高橋、顔が明るくなる。

僧侶「そこに座って、誰かをずっと待っていた。寂しそうな顔をしてね」

高橋「（申し訳ない顔で）そうですか」

と、たこの滑り台の方へ行く。

僧侶「待っても来ないと思うぞ」

高橋、足を止めて、

高橋「え？」

僧侶「3日くらい前だったか。東京に引越

すことになったと話していた」

高橋「東京!? 東京のどこに!？」

僧侶「さあ。そこまでは知らんな」

高橋「(覇気のない顔) そう……ですか……」

風が吹いて落ち葉が音を立てる。

高橋M「約束を忘れていたわけじゃないんだ、<sup>6</sup>

と。もしいつか会えた時には、それだけは

伝えたいと、そう思った」

○住宅街・道(朝)

高橋(22)がランニングをしている。

軽快な足音が閑静な住宅街に響く。

人は誰もいない。

高橋N「前田理菜。2006年2月5日、長

野県古諏訪町で大学教授の父・前田聡と音



楽家の母・前田明日香の間に生まれる。理菜の家は町でも有名な豪邸で、その広さはおよそ300坪。裕福な生活ぶりが伺えるものだった。近所からの評判もよく、家族3人と犬1匹で、幸せそうに暮らしていたと近隣住民は口を揃えて言う」

○商店街・中（朝）

店のシャッターは閉まっ  
ていて、誰も  
いない。

高橋、道の真ん中を走る。

高橋 N「しかし、その幸せは一夜にして奪われた。2015年9月24日、理菜が9歳の頃。自宅を訪ねて来た何者かによって父と母、そして犬が刺殺。それぞれの遺体には20回以上滅多刺しにされた跡があり、リビングは血の海だったそうだ。その時理菜も自宅にいたが、幸か不幸か、衣装部屋に隠れていたため助かる。事件のシヨックから理菜は事件当日の記憶が曖昧で、有力

な証言は得られなかった。結局、現場に残された凶器と近隣住民の目撃証言により、遺体の第一発見者である竹内魁（20）が逮捕。罪のない家族を襲ったその残忍な犯行は全世界に衝撃を与え、竹内本人だけでなくその家族への非難がやまなかった。竹内には無期懲役の判決が下り、彼は今も塀の中にいる」

○住宅街・公園の前（朝）

高橋、公園の前を通り過ぎる。

去り際にたこの滑り台が視界に入る。

高橋「1人になってしまった理菜は母・明

日香の妹夫婦の養子となり、以来鈴木理菜として東京で暮らすことになった」

○アパート・正面／高橋の部屋の前（朝）

高橋「ハア、ハア、ハア」

高橋、足を止めてスマートフォンを止める。  
タイマーを止める。

1階の郵便ポストには「鈴木」と「高橋」の苗字が並ぶ。

高橋、階段を上って自分の部屋の前へ。理菜の部屋を見てから中に入る。

○同・高橋の部屋の中（朝）

高橋、冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出してゴクゴク飲む。

ランニングウェアを脱ぎながら浴室に向かう。

シャワーの音が聞こえる。  
× × ×

高橋、首にタオルをかけ、髪の毛を拭きながらテレビをつける。

キッチンでプロテインを作る。  
立って飲みながら朝のニュースを見る。

アナウンサー「おめでたいニュースです。女優の *wakana* さんが所属事務所を通じて結婚を発表しました。お相手は5つ年上の実業家ということですよ」

高橋、プロテインを飲み干す。

× × ×

高橋、外出の用意を済ませた状態で簡易的な仏壇の前に正座する。

仏壇には竹内早紀（40）の写真と骨壺。

高橋、目を閉じて手を合わせる。

15秒ほどで目を開ける。

スマートウォッチで時刻を確認。8..

20。

高橋 M 「そろそろか」

と、壁を見る。

ちようど外から隣の部屋のドアが開閉

された音が聞こえる。

足音は階段を下りていき、やがて聞こえなくなる。

高橋 「（早紀の写真に）行ってきます」

と、リュックを背負って立ち上がる。

○三田大学・敷地内

サークルの勧誘で花道ができ、賑わう。  
理菜と親友・花村夏凜（18）が道の  
真ん中を歩く。

沢田「その2人！ もうサークル決めた？」  
と、3年生・沢田翼（21）が声をか  
ける。

理菜「まだです」

沢田「良かったー！ じゃあうちにおいで。  
ダイビング、楽しいよ」

理菜「私たちダイビングとかやったことなく  
て……」

沢田「だーいじょうぶ！ 俺も初心者だった  
から」

理菜「どうする……？」

理菜と夏凜、顔を見合わせる。

沢田「お願い！ 俺先輩に可愛い子連れて行  
くって約束しちゃったからさ。新歓だけで  
も来てほしーなー」

夏凜「それ絶対女の子全員に言ってるじゃな  
いですかー」

と、笑う。

沢田「まさか。2人だから言ってるんだよ」

と、ウインク。

理菜、苦笑い。

○同・講義室内（朝）

授業前、学生がまばらに座り談笑。

理菜と夏凜も席に着く。

夏凜「チャラかったけど悪い人じゃなさそう

だったね」

理菜「新歓どうする？ 行くだけ行ってみ

る？」

夏凜「ね、行ってみよ！」

後ろの扉から理菜たちに近づいてくる

人影。

理菜、人の気配を感じて振り返る。

通路に高橋が立っている。

理菜「高橋さん!? なんでここに……!?」

高橋「俺もここの学生だから」

理菜「初耳です！」

高橋「今初めて言った」

夏凜「（目をキラキラさせて）だーれこのイケメン」

と、理菜に耳打ち。

理菜「アパートのお隣に住んでる高橋さん」

高橋「どうも」

と、軽く頭を下げる。

夏凜「あーあなたが噂のお隣さん！うちの

理菜がお世話になってます。この子しっかりしてはいるんですけど、たまに抜けてるところがあるし、お人好しだからちよつと心配で。知ってる人が隣だと私も安心です」

夏凜、高橋の手を握り握手する。

高橋 M「俺のこと何も知らないだろ」

理菜「（恥ずかしそうに）ちよつと夏凜落ちて着いて」

と、引き離す。

教授が入ってくる。

後から入ってきた学生が席に着き始める。

高橋「ここ座っていい？」

理菜「はい、もちろんです」

高橋、理菜の隣に座る。

理菜、緊張した様子で高橋を気にする。

### ○同・食堂

昼食時、学生で席が埋まり賑わう。

理菜と夏凜と高橋、昼食を食べながら

会話。

夏凜「高橋さんはサークルとか決めてます？」

高橋「いや、特に」

夏凜「私たちダイビングサークルの新歓行く

んですけど、良かったら一緒に行きませ

ん？」

高橋「へえ。いつなの？」

理菜「今日19時から、駅前の居酒屋です」

高橋、面倒くさいという表情。

高橋「俺はいいや。新入生って年でもないし」

夏凜「高橋さんもしかして年上ですか？」

高橋「うん。今年23」



夏凜「だからかく！　なんか大人っぽいと思  
ってたんです！」

と、ワクワクした顔で理菜を見る。

理菜「（口パクで）やめて！」

高橋「じゃあ楽しんで。ハメ外して飲み過ぎ  
んなよ未成年」

と、去って行く。

夏凜「さすがに新歓で1年生に飲ませたりと  
かないよね？」

理菜「多分……？」

親友・市川拓也（18）がやってくる

理菜「あれ、拓也。どうしたの？」

市川「（怪訝な顔で）なんでアイツがここに  
いんだよ。まさかアパートから理菜につい  
てきたんじゃない？」

理菜「違うの。高橋さんもうちの学部の一  
年生だったの」

市川「嘘つくのヘタかよ」

理菜「嘘じゃないって！　ねえ夏凜」

夏凜「うん」

市川「（嫌そうに）へえ……」

夏凜「年上だけどね。今年23歳なんだって」

市川「（興味なさそうに）へえ」

夏凜「興味ないなら聞かないでよ」

市川「2人とも気をつけろよ。アイツは胡散

臭い。絶対裏の顔がある」

理菜「（笑って）またその話？ 疑いすぎだ

ってば。高橋さんは大丈夫」

夏凜「いるよねえ。そうやってイケメンにケ

チつける人。いいじゃん。ちょっとミステ

リアスな年上男性ってなんか惹かれる」

市川「あのなあ！ お前らもっと危機感をも

て！（指をさして）特に理菜！ ストー

カーオヤジにつけられたばっかだろ！」

理菜、うっと固まる。

理菜「はい……気をつけます」

夏凜、微笑ましそうに2人のやりとり

を見つめる。

○同・学習スペース（夜）

高橋、テーブルに授業資料を広げてパソコンを触る。  
隣のテーブルの女子の会話が聞こえてくる。

女子1「あ、しまったあ」

女子2「どうしたの？」

女子1「（残念そうに）ダイビングサークルの新歓今日だったの忘れてた。もう始まってるよね」

女子2「（周りを気にしながら）行かなくて

正解だよ」

高橋、タイピングの手を止める。

女子2「（小声で）先輩から聞いたんだけど、うちの大学のダイビングはヤバいらしいよ」

女子1「（小声で）ヤバいつて？」

女子2「（小声で）OBがやりたい放題で、自分たちが馴染みのクラブのVIPルームでクスリやったり、レイプまがいのことしてるって噂らしいよ？」

女子1「（小声で）うそ、それマジでヤバい

やつじゃん！ 捕まるんじゃない？」

高橋、女子たちのテーブルの空いている椅子に座る。

高橋「その話、詳しく聞かせてもらえる？」  
女子たち、驚きながらも高橋の顔面に  
歓喜。

○居酒屋・座敷（夜）

テーブルが3列並び、貸切の室内。

理菜と夏凜の向かいには沢田。

沢田「2人は何飲む？」

と、アルコールのドリンクメニューを  
見せる。

理菜と夏凜が目を合わせて戸惑う。

沢田「ごめんごめん。まだお酒はダメだったね。20歳になったら一緒に飲もうね」と、ノンアルコールのメニューを見せる。

理菜と夏凜、ホッとする。

理菜「私はジンジャーエールを」

夏凜「私はコーラで」

沢田「ジンジャーエールとコーラね。隣の子は？」

と、理菜の隣に座る1年生・林彩乃

(18)に聞く。

彩乃「烏龍茶お願いします」

沢田「少々お待ちください、お姫様方」

と、立ち上がる。

× × ×

それぞれのテーブルで盛り上がり、騒がしい室内。

ドリンクを飲みながら、

彩乃「2人は三田大ですか？」

理菜「はい！ 私たち国際文化です」

彩乃「私は工学部です」

夏凜「工学部だと拓也と一緒にだね」

彩乃「拓也……？」

理菜「附属からの友達なんだけど、茶髪で、

結構背が高くて」

夏凜「多分一番賑やかなグループの、一番騒

がしいやつ！」

彩乃「あー！ あの人かな！」

理菜「（笑う）やっぱり騒がしいんだ」

彩乃「（慌てて）ごめんそういうわけじゃない  
くて！」

夏凜「いいのいいの。中学の時から騒がしい  
で有名だったから」

理菜「（ニコニコしながら）そうそう」

沢田の声「はいいちゅうもーく！ 二次会行  
くぞー！」

学生たちが立ち上がり始める。

沢田、理菜たちの所に来て、

沢田「ここは二次会来てくれるよね？」

と、目を潤ませる。

夏凜「はい行けます！」

理菜「私も！」

沢田「よしよし」

彩乃「（恐る恐る）すいません私はここで  
……」

沢田「（明るく）そっかあく残念！ 気をつ

けて帰ってね」

彩乃「はい、ありがとうございます」

沢田「じゃあ2人はこのまま行きますよー」

と、理菜と夏凜の肩に手を回して立ち上がらせる。

理菜、さりげなく沢田の手を肩から外しながら、

理菜「先輩。二次会はどこに行くんですか？」

沢田「それは行ってからのお楽しみ」

と、今度は理菜の腰に手を回す。

理菜、引き攣った笑顔。

### ○クラブ・中（夜）

暗いフロアをカラフルな照明が照らし、爆音で音楽が流れている。

中心で踊る人や、バーカウンターでお酒を飲む人々。

理菜と夏凜、ボックス席に座ってストロー付きのジュースを飲んでいる。

隣のボックス席で男女が体を密着させ

てイチャイチャしている。

理菜と夏凜、「おー」という顔で見る。

理菜「（大声で）なんかすごいね！」

夏凜「（大声で）ね！」

沢田「（大声で）いたいた。楽しんでる？」

と、席に座る。

理菜と夏凜「（大声で）はい！」

沢田「（大声で）マジ？俺はうるさすぎて

もうムリ！」

理菜「（口角を上げて）確かに、全然声聞こ

えないですよね！」

沢田「（大声で）え？なんて？」

と、理菜に顔を近づける。

理菜「私もちよっとうるさいかなくて！」

沢田「じゃあ静かな所移動しよっか！」

理菜と夏凜「？」

○同・VIPルーム（夜）

沢田「（ノック）失礼します！」

と、ドアを開ける。



中はガラス張りで、ローテーブルと高級そうな皮のソファが置かれている。ソファには見たことない男が3人と、露出の多い派手な女性が2人座っている。

O B 「遅かったな」

沢田 「すいませーん」

夏凜 「（小声で）先輩、この方たちは？」

沢田 「うちのサークルのO Bの先輩。優しい人たちだから安心していいよ」

O B 「こっちおいでよ。一緒に話そ！」

と、理菜たちを手招きする。

理菜と夏凜、顔がこわばる。

沢田 「さ！」

沢田、理菜たちの背中を押しして中に入る。

理菜と夏凜、それぞれO Bたちの隣に座る。

O B 「何がいい？ ハイボール？ シャンパン？」

理菜「あつ、アルコールはちよつと……」

沢田「（わざとらしく）先輩、この子達未成年ですから。飲ませちゃダメですよ。今そういうの厳しいンスから」

O B「ごめんごめん。じゃあジュースな」

理菜と夏凜、緊張している。

O B「緊張しなくて大丈夫だよ。ここではリラックス。寝っ転がってももいいよ」と、ソファにもたれかかる。

理菜「（作り笑い）あはは」

× × ×

理菜、ストローでチビチビとジュースを飲む。

夏凜、ストローでゴクゴクとジュースを飲み切る。

既に2杯グラスが空になっている。

沢田「夏凜ちゃんすごいね、そんな喉乾いてたんだ」

夏凜「（陽気に）そうみたいです。これすごい美味しくて」

頬がやや赤い。

理菜「（心配そうに）夏凜大丈夫？」

夏凜「だいじょぶだいじょぶ」

と、立ち上がって歩こうとするがフラつく。

沢田が支える。

沢田「おーおー大丈夫？」

夏凜「ちよっとお手洗いに……」

沢田「いいよ行こっか」

沢田、夏凜を支えながら出口に向かう。

理菜「あの、私が！」

理菜、立ち上がると視界が揺れて膝から崩れ落ちてOBの方に倒れ込む。

顔を上げるとすぐ目の前にOBの顔。

OB「大丈夫？」

理菜「……はい……」

理菜、意識が遠のいていく。

OB「具合悪かったら休もっか。横になりなよ」

と、理菜をソファに寝かせ、上に跨っ

てズボンのベルトを緩める。

理菜M「ああバカだ。拓也にも高橋さんにも

言われてたのに……」

その時、ドアがバーンと開く。

理菜、目を凝らしてドアの方を見ると、

そこには高橋の姿。

理菜「高橋……さん？」

OB「おい、つまみだせ」

と、部下らに指示。

高橋を外へ出そうとするが、高橋は華

麗に交わし、部下たちを背負い投げ。

高橋、テーブルのそばまで来て、

高橋「これもらうぞ。走ったせいで喉乾いた

んだよ」

と、独り言を言いながら理菜のグラス  
を取る。

部下「（床を這いながら）テメエなんだよ急  
に入ってきて！」

と、高橋の足首を掴む。

OB、部下に手の平を向けて制止させ

る。

部下「？」

OB、高橋がグラスを傾けるのを楽しそうに見つめる。

OBM「バカが。そっちには即効性の眠剤を倍量入れてある」

理菜「それ……ダメ……」

と、手を伸ばす。

しかし高橋はグラスに口をつけて全て飲み干してしまう。

平然とグラスを机に戻す。

OB「（仰天して）なっ……そんなバカな！」

高橋「どうした？ まさか、クスリでも入ってた？」

OB、冷や汗をかく。

高橋「さっさと失せろ。警察呼ぶぞ」

固まる一同。

高橋「ほら解散解散！」

と、声を張り上げる。

OB「チッ。おいお前ら出るぞ！」

OB、すれ違い際に高橋の肩にわざとぶつかってドアから出て行く。

理菜、起き上がる。

理菜「夏凜は？」

高橋「大丈夫。無事だよ」

理菜「良かった……」

高橋、ペットボトルの水を開けて理菜に渡す。

高橋「ほら、飲みな」

理菜、両手でペットボトルを持ってごくごく飲む。

高橋「どう？」

理菜「大丈夫です。高橋さんは大丈夫なんですか？」

高橋「俺は慣れてるから平気。立てる？」

理菜、頷く。

高橋に軽く支えてもらいながら立ち上がりドアの方へ歩く。

○大通り・歩道（夜）

1台のタクシーに夏凜が乗りこむ。

理菜「運転手さんに住所言ったからね」

夏凜、力なく手を挙げる。

高橋「（運転手に）お願いします」

ドアが閉まり、タクシーが動き出す。

高橋「俺たちもタクシー拾うか」

と、手を挙げる。

理菜「私、歩いて帰ります」

高橋「は？ 何時だと思ってるの」

理菜「でも、車乗ったら酔いそうで……すい

ません、本当に大丈夫なので。今日はあり

がとうございました」

理菜、歩き出すがフラフラしている。

高橋の前にタクシーが停まりドアが開

く。

運転手「乗らないんですか？」

高橋、フラフラ歩く理菜の後ろ姿を見

てため息をつく。

高橋「乗らないみたいです。すみません」

と、理菜を追いかける。

理菜、コンクリートの凸凹で体勢を崩す。  
転びそうになったところを高橋が支える。

高橋「なにが『歩いて帰ります』だよ」

高橋、地面にしゃがんでおんぶの姿勢をとる。

理菜「（全力で）いいです！　大丈夫です」

高橋「早く」

理菜「だって、それは申し訳なすぎます」

高橋「支えながら歩くよりこっちの方が楽だから。分かったらさっさと乗る！」

理菜「すみません……」

と、高橋の背中に体重をかける。

高橋、軽々と立ち上がり歩き出す。

### ○住宅街・道（夜）

理菜を背負って歩く高橋。

2人以外に通行人はおらず、民家の電気も消えている。



理菜「高橋さんには助けてもらってばかり  
ですね」

高橋「本当に。世話が焼けるお隣だよ」

理菜「すみません……」

理菜と高橋、公園の前を通りかかる。

中にはたこの滑り台がある。

理菜「あ」

高橋「ん？」

と、立ち止まる。

理菜「いや。あのたこの滑り台懐かしいなっ  
て。昔よく行ってた公園にもあんな遊具が  
あって」

高橋「……ちよっと休憩するか」

と、公園の中に入っていく。

### ○公園・中（夜）

誰もいない静かな公園。

街灯が1つ、白い光でたこの滑り台を  
照らしている。

理菜、たこの滑り台の上に足を伸ばし

て座る。

高橋、登ってきて理菜の隣に座る。

高橋「はい」

と、ペットボトルの水を渡す。

理菜「ありがとうございます」

理菜、財布を出そうとすると、

高橋「いいよ。年上には奢られとけ」

理菜「ゴチになります」

と、キャップを開けて水を飲む。

高橋「君って本当に甘ちゃんだな。こんな夜

中に歩いて帰るとか言うし。世の中舐めす

ぎ。さっきも、俺が行かなかつたら今頃あ

の場で回されてたよ」

理菜「（深刻な顔）返す言葉もありません

……」

高橋「君に何かあったら悲しむ人がいるだろ。

それを忘れんな」

理菜「そうですね……これからはもっと気を

つけます」

理菜、水を持つ手が震えている。

高橋、理菜の手元を見て、

高橋「でも……あんな薬入りの酒飲まされて、意識手放さなかったのは偉い。よく頑張ったな」

と、理菜の頭に手を置く。

理菜、目を見開いて高橋の方を見る。

※ ※ ※

(フラッシュ)

高橋「大丈夫、1人じゃない。俺と一緒にだから」

と、理菜の頭を優しくポンポンとす  
しかし、高橋(13)の顔ははつきり  
しない。

※ ※ ※

高橋「どうかした？」

理菜、首を横に振って、

理菜「いえ、なんでもありません」

と、はにかむ。

理菜M「なんだろう。すごく懐かしい感じがした」

○三田大学・食堂

理菜と夏凜、テーブルで求人誌を見て  
いる。

高橋がやって来て、

高橋「今度は何探してんの？」

夏凜「高橋さん！」

夏凜と理菜、勢いよく立ち上がって床  
に土下座する。

夏凜「その節は大変ご迷惑をおかけしました」

理菜「おかけしました」

周りの学生が高橋を不審な目で見る。

高橋「そういうのいいから、マジでやめて！」

高橋、理菜たちを席に座らせ、自分は

理菜の隣に座る。

高橋「で。何探してんの？」

理菜「私のバイトと一緒に探してもらった  
んです。家賃とか生活費とか、いつまでも  
両親に甘えるわけにはいかないので」

高橋「ふくん」

夏凜「でもなかなかいいのがないんですよ」

手っ取り早く稼げるのは、やっぱりガールズバーとかだけ……」

高橋、今にも怒り出しそうな鋭い目つきで夏凜を睨んでいる。

夏凜「（咳払いして）何も言っても、何も……」

理菜、苦笑いして、

理菜「居酒屋とかも22時以降は時給上がる所多いけど……ほら、うちの周りって夜すごく暗いじゃないですか。帰る時ちよつと怖いなあ……」

夏凜「私と一緒に家庭教やる？ 時給はいいよ」

理菜「私夏凜みたいに教えるの上手じゃないからなあ」

夏凜「理菜なら大丈夫だと思っただけだね。でもそれなら、ちよつと時給安くてもシフト入れまくってバ畜になるしかないよ」

理菜「だよなあ」

と、机に項垂れる。

高橋「（何か思いついた顔で）あのさ」

理菜と夏凜「？」

高橋「良かったら俺のここくる？」

理菜「え……？」

夏凜、パッと顔を明るくする。

夏凜「高橋さんどこでバイトしてるんです

か？」

高橋「知り合いのバーなんだけど。時給いいし、小さな店だから働きやすいと思う。バーだから終わるのは遅いけど、俺と一緒に帰れるし」

理菜、頬を少し赤らめる。

夏凜「高橋さんも、シヤカシヤカしてお酒作ってるんですか？」

高橋「まあ、うん」

夏凜「うわ、それ超見たい！」

と、興奮する。

理菜「バーか……私お酒のこと全然知らないけど大丈夫ですかね……？」

高橋「慣れれば自然と覚えるよ。俺も最初は

何も知らなかったし」

夏凜「そうしなよ！　高橋さん一緒だったら

理菜も安心じゃん」

理菜「…：そうだよね。（高橋に）よろしく

お願いします」

高橋「分かった。マスターに聞いてく。絶対

大丈夫だと思うけど」

理菜「はい！」

理菜、嬉しそうにする。

○雑居ビル・正面（夜）

地下へ続く階段の前に【Bar blanc】の  
立て看板。

○バー・店内（夜）

カウンター6席、テーブルが4つのこ  
ぢんまりした店内。

テーブル席は3組埋まっている。  
マスター・白水透（54）、カウンタ  
ーの中でドリンクを作る。

高橋、テーブル席の注文を取っている。  
扉が開いて編集長・佐々木俊哉（4  
5）が入ってくる。

白水「（穏やかに）いらっしやい」

佐々木、軽く手を挙げ、白水の前に座  
る。

高橋、カウンターの中に戻ってきて、  
流れるような作業でグラスに丸い氷を  
入れ、ウイスキーを注ぐ。

高橋「また来てる」

佐々木「俺を暇人みたいに言うな。酒飲む合  
間をぬって、頑張ってる仕事してんだよ」

高橋「相変わらず言ってること滅茶苦茶」

佐々木「うるせえ！ こちとら締切前で切羽  
詰まってるんだ。ちったあ労われ」

高橋、佐々木の前にコースターを置い  
てバーボンロックを出す。

高橋「現実逃避もほどほどに。編集長さん？」

佐々木、悔しそうに高橋を睨む。

高橋、フツと笑う。



白水、2人のやりとりをにこやかに見守る。

再び扉が開き、師範・塚目凜子（3

4）が入ってくる。

凜子「こんばんは。飲んでるう？」

高橋「いらっしやいませ！」

白水「いらっしやい」

佐々木「お前！俺の時とは全然態度違うじ

やねーか！」

と、高橋を指差す。

高橋「だって師匠ですから」

と、知らん顔。

凜子「あれ、佐々木さんまた来てる」

と、佐々木の隣に座る。

佐々木、嫌そうな顔をする。

凜子「え？何その顔」

佐々木「（口をへの字で）別にい」

白水、クスクス笑う。

高橋「今日は何にしますか？」

凜子「んーじゃあマティーニお願い」

高橋「かしこまりました」

佐々木「（マスタ―に）コイツ俺ん時は聞か  
なかつた！」

と、高橋を指差して駄々をこねる。

白水「ここでバーボンロック以外飲んだこと  
ないだろ？」

凜子「ないよねー？」

と、佐々木の頬に指を押し付ける。

佐々木「やーめろっ！」

と、避ける。

女性客1の声「すいませーん！」

白水「湊。頼む」

高橋「はい」

高橋、女性客2人組の席に注文をとり  
に行く。

高橋「お決まりでしょうか」

女性客1「お酒強くないんですけど、飲みや

すいのってありますか？」

高橋「でしたら、フルーツ系のカクテルがお  
すすめですね」

と、メニューを指す。

女性客1と2、「迷っちゃうね」と、

高橋をチラチラ見ながら楽しそうに会話。

女性客1「じゃあ私は桃でお願いします！」

女性客2「私はメロンで！」

高橋「かしこまりました」

と、席を離れようとする。

女性客2、高橋の手に触れて止める。

女性客2「あの！ お兄さんにカクテル作っ

てもらえますか？」

女性客1「えー私も！」

高橋「……はい。かしこまりました」

高橋、女性客の手をやんわり離してカウンターに戻る。

高橋「桃とメロンです」

白水「了解」

高橋と白水、ドリンクを作り始める。

凜子、カウンターに肘をつけてニヤニヤしながら高橋を見る。

凜子「相変わらずモテモテだったねえ」

高橋「え？」

白水「おかげさまで、女性のお客さんが随分増えたよ」

佐々木「まあ、黙ってれば顔は悪くないからな。中身はいつまでたってもガキだけど」と、高橋に向かって言う。

しかし、高橋はシェイカーに集中していて聞こえていない。

× × ×  
高橋、扉のところまで女性2人組を見送る。

女性客1「お兄さん次シフトいつ入ってるんですか？」

高橋「だいたい毎日います」

女性客2「じゃあまた来ます！」

高橋「夜遅いのでお気をつけて」

女性客たちが店を出る。  
佐々木と凜子はまだ残っている。

白水「そういえば湊。あれから大丈夫なの

か？ 彼女は」

凜子「彼女って、鈴木理菜ちゃん？ 何かあ

ったの？」

高橋、テーブル席を拭きながら、

高橋「ストーリーカーオヤジにつけられてたんで

す。もう解決したけど。あの子危機感がな

さすぎて、見てるこっちがヒヤヒヤする」

凜子「やだコワ〜。今度ここに連れてきなよ。

私が護身術教えるから！」

高橋「（思い出して）そうだ、マスター。あ

の子ここで雇ってもらえませんか？」

白水「バイト探してるのか？」

高橋「そう。下手な所で働かれるより、一緒

の方が俺も動きやすいから」

白水「：：分かった。いつでもいいから連れ

ておいで」

高橋「助かります」

佐々木「お前の方がよっぽどストーリーカーだよ

な。大学もバイトも同じ。しかも部屋が隣

ってのはさすがに引くわぁー」

と、胸の前で腕ををクロスさせる。

高橋「部屋は本当にたまたま！ 俺の方が先に住んでたんで！」

白水、物申したそうな顔で高橋を見る。

凜子「それより、キャンパスライフはどうなの？ 楽しい？」

高橋「楽しいとかは……俺は大学に行きたかったわけじゃないし」

凜子「目的は別にあるわけだけど、せっかく入ったんだから、思う存分青春を謳歌しなさいよ」

凜子、高橋の頭を手のひらで掴んで揺らす。

高橋「……別にキョーミない」

と、あっさり交わす。

白水「湊。今日はもう上がっていいぞ」

高橋「はい。お疲れ様でした」

× × ×

高橋がいなくなった店内。

凜子「湊が初めてこのバーに来てからもう3

年かあ。確かあの時はギリギリまだ10代  
だったよね。なんか昨日のここのように思  
えちゃうー

佐々木「懐かしいな……」

と、グラスを見つめながら傾ける。  
白水、黙ってグラスを拭いている。

○大通り・車道（深夜）

高橋、ヘルメットを被ってバイクで走  
っている。  
走っている車はほとんどいない。

佐々木の声「なーんかコソコソやってるとは  
思ってたけど。まさか自力で鈴木理菜を探  
し出して、しかも同じ大学に合格すんだか  
ら。大したやつだよ、ほんとー」

○アパート・正面（深夜）

高橋の乗ったバイクが駐輪場に戻って  
くる。  
エンジンを消してヘルメットを脱ぐ。

高橋「そっか。ヘルメットいるな」

と、スマホでヘルメットを検索。  
女性らしいものばかりを見ている。

○同・階段（深夜）

高橋、スマホを見ながら音を立てない  
ように階段を上って行く。

○同・高橋の部屋の前（深夜）

高橋、右隣の理菜の部屋を見る。  
電気はついていない。  
鍵を開けて自分の部屋に入る。

（了）